

母から聞いた東京大空襲

さかいじゅんこ
酒井淳子さん

私は昭和 17 年 3 月 14 日に東京都足立区千住寿町で生まれました。父は、徴用に行っているときに無理をして病にかかり、昭和 18 年 1 月 4 日に亡くなっています。

大黒柱の父を失った私たち母子は、昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲に遭いました。大分前になりますが、母はよくその時の様子を話してくれました。

「B29 爆撃機の空襲警報がいつなるか、幼い私をおぶったままで横になったり、サイレンがなると急いで防空壕に逃げたよ。毎日、その繰り返しやったよ。えらい怖かったね。」

「火の中を逃げるとき、綿入れの帽子と綿入れのねんねこ 2 枚でおんぶして、両手には父の位牌が入った荷物やわずかの必要に迫られた物を持って逃げたよ。」

「逃げてるとき、このあたりに大きなお人形さんの工場があったんやろうかと思ったよ。我に返って周りをみると川に入って人がいっぱい亡くなっていたわ。土管の中にも皆、水のある場所へ行けば何とかなるのではと思っていたんだろうね。」（一瞬の思い、わかりますね…）

母が逃げているとき、私は背中に負ぶわれて「熱いよ、熱いよ」と泣いていたそうですが、逃げるのに必死な母には声が届かなかったのですね。

「周りの人のねんねこに火がついていますよ！ の声にびっくりして我に返えり、荷物どころか我が子を助けるために必死だったわ。両手の荷物も火の

勢いで、さーっと吹き飛んでいたわ。恐ろしかったわ。」とっていました。

生き地獄とは、このことでしょうか。まさに母あつての私でした。

このとき私は、右足の指に火傷を負いました。幼かったので、小さく柔らかい指はくっついてしまいました。たくさん患者であふれた病院に、母は私を連れて行き、「指のところに早くガーゼを何か所か挟んで助けてやってほしい！」とお医者さんに必死でお願いしてくれました。

お母さん、助けてくれてありがとうね。

早くに処置したそのおかげで、形は悪くても歩けるし、小学校の運動会では裸足で走る競技に参加できました。今でも鮮明に思い出されます。

4歳のときに富山の五百石にいた親戚に縁故疎開し、その後、魚津に住むことになりました。魚津では、田方町に住み、大町保育園、大町小学校、西部中学校に進み、魚津高校（定時制4年間）では働きながらの楽しい学校生活を過ごしました。学校では、勉強を習い、多くの友達ができました。また、家の近所にもたくさん友達がいて、いつもみんなで遊びました。

人もよし、環境もよし、私は魚津が大好きです。

私には兄もいましたが、体が弱く、早くに亡くなってしまったので、母は「あなたが元気に育つように、栃木県の三峰山におぶって登って、おはらいをしてもらったよ」としていました。

その母も3年半前に95歳で静かに息を引き取りました。毎日顔を合わせ話していたのに淋しい気持ちでいっぱいです。母は亡くなる前に「お母さん、火傷させてしまつてごめんね。」と言ってきました。「お母さんありがとう！心配せんでいいよ。色々な人たちと運動したり、いっぱい元気もらつとるんだから」という私の返事に、大きくうなずいていました。

母は、大正5年7月1日生まれなので、大正12年9月1日に起こった関東大震災にも遭遇し、命拾いをしています。本当に波乱万丈の人生でしたね。

「お母さん、私を生んでくれてありがとう。お母さんの娘でよかったよ。これからも家族とともにしっかりと生きていくから、天国から見守っていてね。」と写真に話しかけています。人との関わりで、私は元気をもらい、ありがたいことです。

戦争は絶対反対です。どれだけ多くの人たちが犠牲になったでしょうか。恐ろしいことです。一人ひとりが尊い命です。

過去のことだと終わらせたくありません。みんなで話し合うことが大切なことだし、また助け合い、この問題を考えていかななくてはならないと切に思います。

最後に、犠牲になられましたたくさんの皆様のご冥福をお祈りいたします。